

第二章 新劇協会の苦闘と伊沢蘭奢の行路

一 日ソ交流と内藤民治一

一

芸術座の一座員であった畑中蓼坡は、島村抱月の急逝後大正八年に、脚本家長田秀雄等の支援を受けて新劇協会を結成した。その旗揚げ公演は同年八月有楽座においてなされ、演目である長田秀雄作『轢死』とチェホフの『叔父ワーニヤ』には演出を兼ねて畑中自身、上山草人の渡米により近代劇協会から移籍した伊沢蘭奢、秋田雨雀の紹介による早稲田の学生友田恭助等が出演する。

その翌年二月には民衆座なる名義において同じく有楽座で舞台監督畑中、作曲山田耕筰の『青い鳥』が上演され、水谷八重子チルチル、夏川静江のミチルにより好評を博した。ついで新劇協会は大地震の早くも歳末に渋谷九頭竜女学校の講堂で、シング作『西の人気者』とストリンドベルグ『犠牲』を三日間公演する。震災復興を祈って一月には仙台方面へ従業、二月は帝国ホテル演芸場で『西の人気者』を二日間再演、五月も同じ会場でチェホフ作『桜の園』を提供した。しかし、畑中らは弱小劇団に付きまとう客の不入りに絶えず悩まされる。①

① 秋庭太郎著『日本新劇史』理想社、一九五六年。下巻、三四五―二四七頁。

新劇協会の苦境（秋庭太郎著『日本新劇史』）

この年（大正十三年）の末に築地二丁目の同志会館と約なって、（新劇）協会は毎月五日間、同会館で開演する運びになり、その第一回が十二月にあつて、武者小路実篤の『張男最後の日』、岩野泡鳴の『閻魔の目玉』、正宗白鳥の『人生の幸福』を上演、再演の『人生の幸福』が矢張り好評であつた。翌十四年正月三十日より五日間、同会館における第二回公演として、高田保の『ジャズ』、秋田雨雀の『手投弾』、横光利一の『喰わされたもの』を演じたが、『喰わされたもの』は横光の処女戯曲であつた。次いで二月二六日から五日間、第三回として正宗白鳥の『隣家の夫婦』、金子洋文の『息子』を演じた。

小山内薫、土方与志の築地小劇場が世間注視のうちに華々しく創設開場されたのに打撃されてか、また大衆新劇とも云われるべき沢田正二郎の非常な評判に押されてか、新劇協会の経営は、築地同志会館に立て籠つてからも相変わらず不振であつた。事は『隣家の夫婦』『息子』の芝居が、毎日七、八十人ぐらいの見物であつたというを以つても知られ、こうした少数の観客を前にして、畑中、御橋、伊沢、高橋等は静かにつつましく、しかも何処か楽しく芝居をしていたと云われる。

『演劇新潮』（大正十四年四月）関口次郎の劇評「同志会館で」の冒頭に「築地の同志会館へ行く。丁度開演定刻の六時半、あのどうしたって劇場とも見えない玄関についたのだが、舞台ではガンガン金槌の音が鳴っている。座席の方はがらんとしていて、活動館の喫茶室のような所に、大火鉢を囲んで二十人程いる。かねて新劇協会の見物は少いと聞いていたが、これでは余りに気の毒過ぎると思わずにいられない。三日目のせいか、知っている人もいない。黙って無闇に煙草を吹かしながら、私も大火鉢の側にしがみついている

と、何処かの学校の小使部屋にでもいるような気がする。大火鉢にはばかに大きな薬缶ものっかっている。周囲に集っているものも大体は学生諸君、でなくとも精々二五、六の青年ばかりである。七時過ぎ芝居は始まった。座席には段々に殖えて七、八十人位にはなった。がそれでも見物は少な過ぎる」云々とある。

当時畑中自身も、「不入りは言語の外であった。あの千人もはいる、がらんとした、しかも火の気一つない見物席に、時には十人足らずの見物がふるえて居ることもあった。それが毎日続いた。毎日そうだった。私達も毎日寒さにふるえながら舞台に立った。不入りの味はしみじみ骨の髄まで滲み透った」と書いている。

①

そうした年の暮、畑中蓼坡は作家菊池寛のところへ金策の相談に訪れる。事情を聞いた菊池は即座に二百円を提供し、この訪問が彼および文芸春秋社による新劇協会支援の契機となった。戯曲『父帰る』や小説『藤十郎の恋』によって文壇に加わった菊池は、無名作家であったみずからの懊悩を踏まえ、大正十二年新進育成のため雑誌『文芸春秋』を創刊した。その時点ではすでに『菊池寛戯曲全集』全三巻によって劇作家としての地位を確立し、フランス帰りの岸田国士の活動に注目していた。②

① 秋庭太郎著『日本新劇史』下巻、三四八、三八五―三八六頁。

② 同書。三五〇―三五二頁。

「新劇界の志士」(菊池寛『文芸当座帳』)

私の知っている限りで、新劇協会の畑中蓼坡ほどの芸術家は二人とないと言う気がする。文壇にも芸術家らしい男はいる。だが、彼等の芸術家気質には放埒と怠惰と無節制とがつきまとっている。わが畑中蓼坡は律儀だ、朴直だ、勤勉だ。しかも、その芸術家らしい純情と情熱とに至っては天下その倫を絶すると言っても過言でない。彼は年齒五十に近く、しかも演劇に対してはなお二十の青年の如く、その理想と情熱とを燃え上らせているのだ。土方与志君の如く私財を投じて新劇のために尽くしているのは奇特である。だが畑中君の如くパンと水とを以て、新劇に尽くしている者に至っては悲壮である。・・・彼は常に空手空拳芝居をやることに狂奔している。その狂奔のあまり、新宿の大泥溝に墜落して気絶しかかったことさえある。彼は大道具を自ら車に積んで運んだことさえある。横浜へ金策に行き、帰途電車賃がなく、蒲田へ下車したことさえある。しかも彼はあらゆる困難と戦いながら、常に欣々として次の芝居を計画している。彼は名演出者であるばかりなく、俳優としても決して拙い役者ではない。その俳優としての理解技巧に於いて、経験において日本の他のいかなる俳優とも優に対立し得るのである。しかも『レイボーイ』に於いて、『青い鳥』に於いて、『人生の幸福』に於いて多くの功績を挙げている。

それなのに彼は歌右衛門や梅幸の十分の一はおろか、百分の一の金をも酬われていないではないか。「愚人聖職に列せられ、ガリレオ牢獄に在り」の義憤はわが畑中蓼坡について痛感する。国民文芸会の如きいたずらに人気を追い、時流に媚び、この劇界の志士を表彰することを永久に忘れている。私自身彼のためあらゆる尽力をしてやりたいと思っているが、好劇の諸氏も畑中君の志を壮とし、新劇協会の公演にはその一席

をふさぐだけの好意を示して貰いたい。彼は三月中旬帝国ホテルにおいて『ユーヂット』その他を演る筈である。①

文芸春秋社「新劇協会の経営について」(『演劇新潮』大正十五年一月号)

新劇界の志士畑中蓼坡を首脳とする新劇協会が、多年経済的迫害の中に、我が新劇のために独力奮闘を続けてきたことは周知の事実である。その業績も相当見るべきものがあつたに拘わらず、常に完成の一步前で身動きができなくなつていたのは誠に遺憾である。そこで我が社は、一つのこの劇団の健全な成長を助け、他方今日舞台的不振が痛嘆されている折柄、進んでこれに一つの礎石を与えるため、新劇協会の経営を快諾し、更に目覚ましい活躍を期待することになった。

それがために特に本社は劇壇の新進、岸田国士、関口次郎、高田保、三宅周太郎の諸氏に委嘱し、この劇団の上演目録選定並びに舞台指揮を一任することになった。公演はほぼ年六、七回定期的に挙行する筈であるが、我国新劇の現状に鑑み、何よりも先ず新しき俳優の養成にあらゆる努力を払うつもりである。その計画及び施設については、追つて発表の予定である。

なお、第一回公演は十一月十五日より一週間帝国ホテル演芸場に於て行う筈。それに先立って、同月十三日慶大ホールに於て演劇講演会を開催する。よろしく好劇家の後援を希望したい。

① 菊池寛『文芸当座帳』改造社、一九二六年。一一六一―一一八頁。

大正十五年十一月

文芸春秋社 ①

かくして文芸春秋社の経営による新劇協会後援が震災第五年十一月に開始され、邦人の創作を重視する菊池寛の意向もあって、関口次郎作『鴉』、村山知義作『勇ましき主婦』、金子洋文作『盗電』の各一幕物が、チェホフ作『記念祭』に併せて上演された。昭和二年二月同劇場での第二回公演後援のあとには、文芸春秋社においてバザーが開かれ、畑中・伊沢が野外で演じるとともに、競売の純益金約九百円が新劇協会の基金として寄付される。水谷八重子の参加を得た第三回公演も、とりわけジュール・ロマン作岩田豊雄演出の『クノック』により好評を博した。しかし、帝国劇場への進出を果たし、菊池寛作『真似』を演目とした同年五月第四回公演は不入りにして不評となり、文芸春秋社は劇団から手を引くに至る。②

二

上山草人の近代劇協会へ二九歳で志願した伊沢蘭奢は、大正七年六月有楽座における『ヴェニス商人』で初舞台を踏んだ。「伊沢蘭奢のネリツサも」と評される「落ち付いた良い芸風を見せていた。この人の声調や体格

① 『演劇新潮』、大正十五年一月号、巻頭広告。(秋庭太郎著『日本新劇史』、下巻、三四九―三五〇頁。)

② 秋庭太郎著『日本新劇史』、下巻、三五―三五六頁。

や容貌は練達の努力如何によつては大きな未来を産むことが可能であるように思われる。」①

有楽座での初舞台と内藤民治との出会い（『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』）

その内に（近代劇）協会が有楽座で『ヴェニス商人』を上演することになり、わたしはそのネリツサの役で初舞台をふむことになりました。ある日K先生はわたしを稽古場の別室に呼んで「今度あなたと一緒に初舞台を踏む珊瑚のところへは、後援者から花輪をもらうことになっているが、あなたも誰かに頼んでおいたらどうか。」

と言われたのでした。

この話を聞いて、わたしはほとんど当惑しました。当時芝居道のことは皆目解らず、素直にK先生の仰有るとおりだと思っても、田舎から出たばかりのわたしには東京にたよりにする知人として一人もなし。到底花輪のもらえそうなあてがどうしてもないので、考えあぐねた末に、わたしは国から持って来た衣類を売り払って、七十円ばかりのお金をようやくこしらえて花輪代に宛てたのでした。

初日が聞きました。思い切って、目に立つ立派な花輪に、出鱈目な贈り主の名前がつけられて、その実はわたしからわたしへ、有楽座の楽屋へ華々しく持ちこまれたのでした。有望な二女優！都下の新聞は筆を揃えて、上山珊瑚、伊沢蘭奢の初舞台を報道して、三段抜きで褒め立ててくれたのでした。・・・

① 『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』世界社、一九二九年。三四七頁。

年に三度か四度の芝居、まして収入の少ない新劇では、女一人が月々生活していくだけの収入もむづかしいことでした。わたしは国許の母から送金してもらったり、結婚当時の紋付の幾かさね、帯、夏冬の着物のごくごく入用のものだけのこして皆売ってしまったりしました。・・・

先生は、わたしがかって婦人記者をしていた経験があるので、谷崎氏と知合いの××社のNに相談したのでした。Nは長い間外国にいた急進主義の人で、その経営している政治・経済・文芸の雑誌は、当時最も新しい高級雑誌として識者間にもはやされていきました。また世話好きで、上山さんはその雑誌の誌上で創作を公にして以来、Nの温厚で太っ腹なのに、すっかり心服してしまったということ、それからなにかや相談に行くということ、Nもまた芸術に興味がある上に、上山さんの東北人特有な素朴な性質を愛して、陰に陽に協会をも後援しているということをききました。

Nは丁度そういう人を欲しいと思っていたといって、すぐ承知してくれました。そして芝居のある時は、芝居をしてもいいという願ったり叶ったりの条件でした。とにかく一度社へ来てくれとのことでしたので、わたしは赤坂にあるその社を訪れました。・・・その人は血色の好い三三、四の、どちらかといえば小柄な愛嬌のある顔をした人でした。長寿を偲ばせる眉の下には慈悲深い瞳が微笑んでおりました。そして大きな鼻孔と落ちついた彼の声は太っ腹のシンボルのように、しっかりとあごのかかりは彼の理性を、ばら色にかがやいた耳の形は彼にそなわった福德を思わせました。わけても彼の唇は幼児のそれのように、対手の心を和らげるなつかしさがありませんでした。それから茶縞のアルパカの上着に白縞のズボン、巾広のネクタイなど

が一層若く見せました。わたしは一見なんだかその人に友達のような親しさを感じました。①

明治二七年新潟で出生した内藤民治は、アメリカに留学してプリンストン大学を卒業した。のちに大統領に選出される同大学総長、ウィルソンの推薦状を得て、彼はヘラルド・トリビュン社のイギリス特派員となる。五二カ国を歴訪して、その成果は『世界実観』全十二巻として日本風俗図絵刊行会より上梓された。大正七年に帰庫して吉野作造らの黎明会設立に協力するとともに、総合雑誌『中外』を創刊する。同誌には堺利彦、山川均、後藤新平、堤清三等のほか、伊藤野枝、神近市子、長谷川時雨も寄稿した。伊沢蘭奢が婦人記者として貢献するのは、この急進的な雑誌である。大正六年ロシア革命が成功した五年後、大震災の前年に日ソ交流の端緒である後藤・ヨツフェ会談がようやく準備された。②

革命前後、ロシアとの関わり（「内藤民治回想録―日ソ関係の裏面史」）

一九一一年にわたしはプリンストン大学を出て、ニューヨーク・トリビュンのロンドン特派員になりました。推薦者はウィルソン総長で、採用してくれたのは親日家のバイヤス編集長でした。ロシア訪問は一九一三年（大正二年）だったと思います。皇帝ニコライ二世とは首都ペトログラードに近いツァースコイ・セ

① 同書。六四一―六八頁。

② 浅野豊美「ワシントン体制と日本のソ連承認」『国際関係論研究』第七号（一九八九年）、七九―八〇頁。

ローンの宮殿で会いました。宮廷の英語通訳ぶきの単独会見でしたが、英国のエドワード七世によく似た風采と想像だけで、あとには何にも印象にのこらないほどの人物でした。・・・

領事の川上俊彦さんはわたしの同郷であることもわかって大いに話が弾んだものです。そうのうちに、スキ焼を御馳走するから一緒に出かけようというのです。行った先はレストランではなくて、横浜のシルク貿易のナンバー・ワン原商会のモスコ―支店長宅なのです。支店長河野道太郎さんと千子夫人に紹介されました。この結婚早々の美しい若夫人の心づくしによって、久しぶりにスキ焼を満腹しました。・・・明眸で下ぶくれのした淑やかな彼女に魅せられたからなのであろうか、彼女の美しい指に一カラット大のダイヤが輝いていたのも、鮮やかな印象として思われます。この千子夫人が今日の東山千栄子さんの五十年前の姿だったのです。わたしは河野夫妻とは、その後長く交際してきました。この夫妻ほど麗しい愛情の豊かなカップルを他に見たことはありません。千子夫人が中年から新劇女優を志願し、人知れぬ苦労も勉強もされたようですが、夫君道太郎さんの心づかさも並々ならぬものだったようです。・・・

わたしが後藤・ヨツフェ会談のお膳立てをするにいたった経過を話しましょう。先にもふれたように、後藤新平さんを知ったのは、当時の大蔵大臣勝田主計さんの計らいによるものです。・・・勝田さんは「労農ロシアの承認と国交回復とかという大國策のためには、よほど優れた政治家を引っ張り出して押し立てねば埒があくものではない」というのです。・・・わたしは何気なく、「蛮爵と緯名されている後藤新平さんならいいんだが」と切りだすと、勝田主計はビックリしたように膝をたたいて、「そうだ、後藤男爵が最適任だ。よく気がついた」といって早速席をたち、後藤さんに電話するのです。

それで翌日の朝、わたしは勝田さんの車に同乗して、麻生桜田町の後藤邸へ。ここではじめてわたしは、

後藤さんにお目にかかったわけです。後藤さんは、わたしの話をよくきいてくれました。そして一週間以内に回答するといいましたが、三日目に森孝三秘書が後藤さんの出馬快諾の返事をもってきてくれました。後藤さんのこの三日間の間に、まず加藤友三郎首相の諒解を得たのでした。・・・

とに角、後藤さんを指導者にして対ソ折衝にスタートすることに決まったのは、大正十一年の夏であったと記憶します。そこで私はモスコウのセン・片山との連絡で、シベリヤのイルクーツク政府総理大臣のヤンソンを代表として送るといつてきたのを蹴飛ばして、すくなくともロシア中央政界を動かしうるもつと有力な大物を、と注文をつけました。そしたら革命軍事委員会の執行委員で対独休戦条約に腕前をみせたアドルフ・アブラムウィッチ・ヨツフェが極東全権として、その頃上海に滞在していた。彼はどうかと片山から照会がありました。ヨツフェならいいということになって、やがて双方手筈を整えて、わたしの方から密使として国際共産党員である田口運蔵君を上海に派遣することにきめました。それが同年の十一月だったと思います。この頃ヨツフェは上海のパレス・ホテルにあって神経痛のために静養中でした。田口君には後藤さんの密書を托したことは勿論であります。そのなかには、神経痛のお患いだそうです。日本にはこの病に利く温泉が幾つもあります。ぜひ気候穏和な日本で治療なさったら如何です？というインヴェイションの主旨が認めてありました。・・・

ヨツフェは志の高い第一級の人物だったとわたしは先にもいいましたが、まさにそのとおりで、相手が彼だったからこそ後藤・ヨツフェ会談が成功したわけです。あの革命後まだ日が浅く、また軍国主義澎湃たる日本にまでやってきて、日ソ国交の橋頭堡を築いたことは、今思い巡らしてもどうてい普通の人間にはできないことではありません。・・・

(熱海ホテルにおける)送別会で、わたしに夫人同伴という案内だったが、妻が病床にあって参席不可能だったので、ガールフレンドの伊沢蘭奢という新劇協会の女優を形式を整えるため同伴しました。あとで田口君が、日露交渉という世界的な舞台で、なかなか人を食った大胆な芝居をみせてもらったといつて笑っていました。伊沢は島根県津和野出身で、同郷の徳川夢声君を頼って上山草人の近代劇協会に入ったのです。草人の渡米後は新劇協会に移った女優でした。①

日ソ交渉の陰の推進者、内藤民治への言及には欠けるが、後藤・ヨツフェ会談の経緯と内容については、鶴見祐輔による評伝『後藤新平』が一六〇頁にわたり精細である。南満州鉄道の総裁や桂内閣等の閣僚を歴任した後藤は、帝政時代のロシアへ二度外遊し、閑院宮載仁を総裁とする日露協会の会長であった。革命によって両国の国交は五年あまり断絶し、社会主義国の要人を初めて迎える政界は異常な緊張に包まれる。

ソヴェエトの要人、ヨツフェ来たる！(鶴見祐輔著『後藤新平』第四巻)

大正十二年二月一日ソヴェエト連邦極東全権ヨツフェが、東京駅に到着した時の光景は、実に殺気、プラットフォームに渦巻くような物凄いものであった。午後零時四十分、下関発特急列車がプラットフォームに

① 「内藤民治回想録―日ソ関係の裏面史」(上)、『論争』一九六二年十二月号、論争社、一八〇、一八四、

着くと、「それッ！」と二百数十名の背広服の人々が雪崩のように、ヨツフェの乗っていた車の外を取り囲んだ。それは出迎人ではなくて、平服の警官と刑事であった。新聞記者も写真班も近付けない。彼等は人間の襖を作って、ヨツフェ一行の車から降りて来るのを待った。

この時ヨツフェの身边には並々ならぬ危険が渦巻いていた。いつ凶漢が現れて、彼を襲撃するかわからない情勢にあったのである。そういう殺気立った危険な空気の中で、伯（後藤新平）はヨツフェとの私的交渉を開始したのである。それは波瀾多き伯の一生に於いても、また不思議な一波瀾であった。当時全然断交して何の交渉もなかったソヴィエト露西亜の代表者を、しかも政府と何の関係もなき一人の資格で伯は東京に招いて、私的に日露国交回復の交渉を開始しようというのである。

当時国内にあった保守的分子は、一人のヨツフェの到来をもって、日本に社会主義的氣勢を煽動する一大危険と考えた。そうして伯自身をもって国本を乱す危険人物として攻撃し、伯の身边は頻々たる危害に曝されたのである。しかも時の政府の内務大臣水野錬太郎は、当初からこの挙に反対であった関係上、警察官の伯の為に尽すところもまた頗る薄かった。時の外務大臣内田康哉も、伯の対ヨツフェ交渉には甚だ冷淡な態度をとった。……

ヨツフェ来！それは蒙古来のように、一部の人々の耳に墜ちた。「赤露の代表者が日本へ来る！」ただそれだけで、共産主義の宣伝が日本の全土に瀰漫するかのようにならざるを得ない。後藤は赤化した。先ず後藤をやっつけてしまえ！」そう叫んで大勢の保守派が立ち上った。そうして伯の身は風前の燈のように危くなつた。……

伯とヨツフェとの最初の会見は、二月一日午後四時三十分から約三時間にわたって築地精養軒のヨツフェの部屋で行われた。その時の精養軒の内外は人の渦であった。制服私服の警官と新聞記者、それに有志家と見物人、その中へ伯はニコニコと鼻眼鏡を光らせながら、自動車で乗り込んでいったのである。……当日の状況を二日付けの東京朝日新聞は左の如く報道した。

「労農政府のキレもので世界舞台の立役者ヨツフェ氏と、我が政界の彗星後藤子爵の会見は、三一号室に円卓を囲んで始つた。併しこの室内からはメリー夫人も退いて、ヨ氏と後藤子が向合い、両側に後藤子の通訳森孝三氏とヨ氏の通訳サロン秘書の四人限りである。両雄の会談は容易に尽きない。サイガーや平野水を運ぶホテルの給仕も会談の室内には入らず、メリー夫人が自ら取次ぎ役を承る。その夫人やウラジミル君の入浴が済み、ウラジミル君の夕食が終つた七時半、やつと三一号室の扉が開いて、紅潮した後藤子の顔が室外に見えた。……後藤子は珍客を無事に迎えた喜びのためか、まだニコニコして、ヨ氏の部屋の扉の外で写真班のためにヨツフェ氏と堅く握手して見せた。」①

以後後藤・ヨツフェ会談は複雑な経過を経つつ四カ月にわたり、大正一二年七月末に打ち切られた。八月二六日ヨツフェが敦賀港より鳳山丸にて帰国の途に就いた六日後、関東大震災が勃発する。激震のさなか成立した山本権兵衛内閣において、内務大臣後藤新平は救済・復興事業の中軸を急遽担うに至る。

① 鶴見祐輔著『後藤新平』後藤新平伯伝記編纂会、一九三七年。第四卷、三八五―三八六、三九六―三九七、

近代劇協会の有楽座公演でデビューした伊沢蘭奢は、生活の糧を得るべく、中外社の婦人記者として勤務する。病妻を抱えた社主内藤民治はやがて彼女と恋仲となり、場末の大森にささやかな愛の巢を探すこととなった。国際的な知見も深く、海外での任務をも度重ねた内藤を通し、伊沢は演劇人としての教養と自覚を培うに至る。男性からの啓発と激励によって、次第に成長する女優は多々あるが、内藤と伊沢の間柄はその好例と云える。

内藤民治からの啓発（『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』）

ある年の秋もまだはじめの頃、わたしは東京の一隅、海に近いある街に、手ごろな住宅を見つけ、引越したのです。・・・そこはまた色街からほど近い場所でありましたので、ときどき流れるように響いてくる三味線の音も陽気に、わたしの思索を邪魔するというよりも、独り居の侘しさを償ってくれました。それから夏の夕方などには、まだ匍い歩く蟹や、貝や新鮮の小魚などの市が路傍にひろげられて、ほのかな磯の匂いが、銭湯帰りのわたしの味覚を刺激して、一層爽やかな気持ちを感じさせるのです。Nはこの新居を整えるために、いろいろの道具や室内の装飾品のようなものを見つけて届けてくれました。彼の細やかな注意は小さな皿や植木鉢などの模様にもまでゆきとどいて、女主人にふさわしい可愛らしさが含まれているのです。・・・

夕方になると必ずNは、彼の名づけた「巢」を訪れて来ました。わたしたちは夜に日をついで飽満に逢いつづけることもありました。朝別れたばかりのNが、午後にもまたひよっこり姿を見せる時などは、キッとわたしの予覚と一致しました。時たまわたしが外出して帰って来ますと、床の間にわたしの好物を入れた紙包みの箱に、噴き出すような諧謔が書いてあつたりして、思わず眼がしらを潤ませることもありました。・・・

妻子あるNの現在の境遇も、わたしの過去の境遇も、こうした二人の心掛け、二人の約束の前にはなんの権威も持たないものでありました。そうして私は妻子あるNに同棲を望んだり、法律的解決を求めたりする考えは起しませんでしたし、またそのために嫉妬や猜疑に苦しむようなことはありませんでした。というのも一つにはNの家庭的事情をよく知り尽していましたし、彼が結婚生活の失敗者であることに同情していたからでもありません。・・・

わたしの教養は、Nの相手になる境域に到達するに余りに低すぎました。漠然とした知的欲求に駆られていたわたしにとって、常にNの言葉が何よりの力強い指導者の声となっていました。・・・折も折、上山先生が渡米されたのと、新劇界の閑散なのを汐に、しばらく劇壇を退いて内容を整えたり、来たるべき新劇界の開花期に具えようという考えから、わたしは従来の環境からすっかり遠ざかって、Nから励まされて、自分の芸術の球根を培うために丹精しました。

だが、Nの主張は、イブセンのノラが「女である前にわたしは人間です」といったように「俳優である前に人間であれ、活き活きした生活人であれ、徹底した社会人であれ」というのでした。そして次のような文句を書き与えたのです。

〔生活信条〕一、生活は思索によって深みを増す。だがそれは現実に結びつけられた時、初めて生活価値を發揮する。一、人生は短い。刻々に生きよ。一、絹糸の神経を撚り合わせて、雑繩の意志を作れ。一、誠

実にして大胆であれ。・・・

〔俳優鉄則〕一、芝居は自己が認識する世界を創り出して大衆にアツピールする一種の社会運動である。一、演技の光彩は個性的表現を通して、一切の人間生活、社会生活を暗示するにある。そうして社会意識の上に、鋭い叡知を動かせ。一、俳優のポピュラリティーは、必ずしも美しい媒体の所有者に限らない。形や声や柄を超越した芸術的良心を報社せよ。一、社交や名聞を顧みるに及ばぬ。サーカス的人気を拝して進め。一、始終植え替える樹には花が咲かぬ。執着を持って、執着は力だ。・・・

Nはまた時々、英文学の本を持って来て、外国語の巧みな表現や、日本語にない原書の特徴から来る興味を説明したり、アチラの新聞に掲載された新しい社会相を批判的に読んでくれたりしました。英語の勉強をしたのもその頃のことでした。

Nがやって来ない間にはわたしは脚本に対する理解力をつけて、その脚本がどんな人生内容を語ろうとしているか、登場人物がどんな性格の持主で、どんな役割を演じているかの把握力を強め、その表現力を養うために、毎月の新刊雑誌に発表される脚本や創作をどんどん読みました。読んだ後には直ぐNの来るのを待ちかねて、感想を述べたり、質問したり、批判を受けたりするのでした。彼もまたそれを唯一の楽しみにしていました。というよりも〈業〉へ帰ってくる、なよりの〈張り〉になっているようでした。

そしてNがお得意の欧米劇壇の消息については、次々に新しい傾向を調べて来ては話してくれました。一モスクワの芸術座や愛蘭のアベ座の歴史については特に詳しい話をしてくれました。演劇国際聯盟を企てたフィルマル・ジエミエの創見や希臘精神の復興を叫んで、一面燃えるような恋に生きたイサドラ・ダンカンの生涯から、ロシヤのメリーホルドの新興劇運動が世界に波紋を描いた事実、それからショウやピランデル

ロヤシーン・オーケーシーなど、特色ある喜劇作家などのことから、エレン・ケリー、エリオノラ、デュゼー、スザン・デスブレイ、サラ・ベルナルなどの名女優が世界に名をなすようになった彼等の精進と苦心のプロセスなど、わたしの脳裡に強い印象を残したのでした。①

大森に設けた愛の住いは大正十二年大震災によって破壊され、伊沢蘭奢は芝の借家へ移転する。同年の十二月二一日畑中蓼坡は九頭竜女学校講堂で復興支援の公演を開始し、彼女はシング作『西の人気者』等に出演した。以後新劇協会は帝国劇場演芸場、渋谷聚落座、築地同志会館で興行を重ね、伊沢はとくに『桜の園』のラネーフスカヤ夫人役で高い評価を得る。

九頭竜女学校における公演開始の一週後、内藤民治は突如ソ連への訪問へ旅立った。さきの後藤・ヨツフェエ談を受けて、日ソ交流の推進を緊急の用務とされ、伴侶たる伊沢に予定の細目も示されず、音信もながく途絶える。この間も舞台を続ける苦悩と気概は、彼女の遺稿に切々と語られるが、これに照応する内藤の紀行をここに掲げる。②

① 『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』一〇〇―一〇三、一〇八―一一三頁。

② 同書。一七四―一九七。

〔参照〕拙稿「第四節 震災からの復興と各種劇団の復活」〔関東大震災からの復興と築地小劇場の興

起〕

内藤民治「大正十三年ソ連への訪問」(「内藤民治回想録―日ソ関係の裏面史」)

後藤・ヨッフエ会談によって、先ず日ソ仮漁業条約が結ばれました。大正十二年の五月でした。・・・その年の秋、芳沢・カラハン会談が北京ではじめられ、同じ頃わたしはモスコウの正式招待をうけて訪ソすることになりました。民間代表とはいえ、日本人としては正式に初めての訪ソです。通訳野村明、秘書西村二郎、レポート係瀧沢勤次の三人が随行しました。・・・わたしがモスコウへ行って、病臥のレーニンを除くクレムリンの要人たちとひと通り会い、特に日ソ会談の最高指導者であったトロツキー、外務当局者としてのチチェリン、リトヴィノフ(外務次官)、ドホスキー(極東局長)と肚を打ち割った相談をしたので、ソ連側のギリギリの線をつかむことができました。・・・

この第一回の訪ソは十月革命後四年を経ていたとはいえ、ソ連は内乱と飢饉があとにつづき、それがようやく収まって、最後に残ったシベリヤの日本軍も撤兵することになったという、いわば大革命の残り火がまだ消えやらぬ時のソ連に、わたしたち一行が行ったのです。ネップ(新経済政策)がやっと軌道にのったばかりでした。そのころはレーニンが脳症で倒れて第一線から退いてしまいました。しかしクレムリン内外の指導者たちには意気軒昂たるものがありました。・・・

第一回訪ソのある日、今日はトロツキーの歓迎大演説会があるとのこと―場所はボルシエー劇場、入場料をとっていましたが、入場者が劇場の内外に溢れていました。彼はどこか前線に長く行っていたらしいのです。セン・片山がわたしを案内して赤い絨緞の敷いてある長い階段をのぼって行くと、皇族席という絢爛たる一室で、それには外国からきている各国共産党の大物が並んでいます。トロツキーの演説は説き去り説き来り、四時間くらい静かな抑揚で流れるようにつづきました。勿論内容はわからなかったが、わたしは深い感銘をうけました。場内のフインキもそのように見うけられました。終ってバレエの『白鳥の湖』をみました。それから二、三日後同じように片山に同道して、クレムリン近くの赤軍総司令部にトロツキーを訪ねたのです。・・・何回目かのときに偶然スターリンがやってきました。その同じ部屋で二人の用談が終わってから私どもはセン・片山を加えて四人で記念写真を写真屋を讀んで撮ってもらったのです。スターリンはまだ独裁者にはならず、二人は不仲ではなかったように見受けられたが、後に何かでわたしは、このときのスターリンのトロツキー訪問は初めの終りで、ただ一回だけだったと知りました。それにしても、あれから間もなく二回目の訪ソの時は、もうスターリンはモスコウから追われて失脚していました。①

後藤新平とヨッフエが切り拓いた日ソの交流は、両国政府による数次の会談を経て、日ソ基本条約(日露基本条約)として結実する。大正十四年一月十日北京において日本公使芳沢謙吉とロシア全権公使とこれに調印し、ソヴィエト・ロシアの承認と両国の国交回復がなされた。同条約の主要部分を抜粋する。

① 「内藤民治回想録―日ソ関係の裏面史」(下)、『論争』一九六三年一月号、一五六―一五七、

日露基本条約（日ソ基本条約）

日本国及ソヴィエト社会主義共和国連邦の関係を律する基本的法則に関する条約

第一条 両締約国は本条約の実施と共に両国間に外交及領事関係の確立せらるべきことを約す。

第四条 両締約国の政府は本条約実施の上は左記の原則に従い通商航海条約の締結を為すべく且右条約の締結に至る迄の間両国間の一般交通は右原則に依り律せらるべきことを約す。

(一) 両締約国の一方の臣民または人民は他方の法律に従い、①其の領域内に到り、旅行をし且居住するの完全なる自由を有すべく、②身体及財産の安全に対し恒常完全なる保護を享有すべし

(二) 両締約国の一方は私有財産権並通商航海産業および其の他の平和的業務に従事するの自由を最広き範囲に於て且相互条件の下に他方の臣民又は人民に対し自国領域内に於て自国の法令に従い付与すべし

(三) 自国に於ける国際貿易の制度を自国の法令を以て定むるの各締約国の権利を害することなく、両国の通商、航海及産業を成るべく最恵国の地歩に置くは両締約国の意向なるに依り両締約国は両国間の経済上または其の他の交通の増進を妨ぐるに至ることあるべき禁止、制限又は課金を他方締約国に対し差別的に行うことなかるべきものとす・・・

第五条 両締約国は互に平和及友好の関係を維持すること、自国の法権内に於て自由に自国の生活を律する当然なる国の権利を充分に尊重すること、公然又は陰密の何等かの行為にして、苟も日本国又はソヴィエト社会主義共和国連邦の領域の何れかの部分に於ける秩序及び安寧を危殆ならしむることあるべきものは之を為さず且締約国の為何等かの政府の任務に在る一切の人及締約国より何等かの財的援助を受く

る一切の団体をして右の行為を為さしめざることを希望及意向を厳肅に確認す・・・

第六条 両国間の経済上の関係を促進する為又天然資源に関する日本国の需要を考慮し、ソヴィエト社会主義共和国連邦政府はソヴィエト社会主義共和国連邦の一切の領域内に於ける鉱山、森林及其の他の天然資源の開発に対する利権を日本国の臣民、会社及組合に許与するの意向を有す ①

大正十四年二月二五日日ソ基本条約を批准した加藤高明内閣は、同年三月二九日帝国議会において普通選挙法を成立させ、これと併行して翌月二二日治安維持法を制定した。「国体ヲ変革シ」とその第一条に規定される。「又ハ私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シ又ハ情ヲ知リテ之に加入シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁固ニ処ス」以後演劇人をも多大に制約する立法の主眼は、日露の国交回復を目前にして、無政府主義者・共産主義者等の運動が近年著しく、一部の者は外国の同志と通報し、または海外より資金を仰いだ過激な運動を取り締まるところにあった。②

大正十五年伊沢蘭奢は築地小劇場よりトルストイ作『闇の力』への客演を依頼されるがこれを固辞する。苦境の新劇協会と文芸春秋社の提携がなり、十一月帝国ホテルでの第一回公演で彼女はチェーホフ作『記念祭』等に

① 「日露基本条約」『日露年鑑』昭和四年版、日露通信社、一九二八年。一一二頁。

② 「治安維持法案（政府提出）第一読会」『第五十回帝国議会議事速記録』一頁。

〔参照〕拙稿「第十四節 築地小劇場への上演禁止」『関東大震災の復興と築地小劇場の興起』

出演した。暮れには年号が大正から昭和へと改元され、翌年新劇協会は文芸春秋社との提携をさらに重ねる。こうした日々のなかで内藤の再度外遊を知らず、帰国の日が電報で伝えられることもあった。

警視庁取調室への検束（『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』）

革命の支那から帰って来るNをむかえるために、わたしは神戸まで参ったのでした。・・・その夜わたし達は神戸を発って東京へ向いました。Nが上海から土産に持って帰った赤と黄のんだら模様ジャケットと薄茶と白の色彩をエキゾチックに配色した帽子は、断髪と相まってわたしの気分を若くしました。そうして車中の人達の視線を絶えず集めてるのでした。

汽車が豊橋辺に来ると、二等の客とも受けとれない、お粗末な洋服を着た三七、八の男が三人乗り込んで来て、私達の向側に席を占めて、私達の方を見ては、しきりにひそひそ話をはじめていました。Nはすぐに気付いたような調子で、「私服が乗り込んで来たね。おかしいね。」と言いました。

わたしは急に心配でたまらなくなって来ました。Nが三年前モスコに往って帰って来た当時のことを思い出しました。―自分までも家宅捜索を受けた、そのゴタゴタ騒ぎを連想するのです。そうして革命の支那から帰って来たNに、どんな秘密がまつわっているのか、事実それが刑事だとすれば、またただごとでは済まないと思ったりしました。・・・

翌朝東京駅に降りて改札口を出ると、私達は意外にも数人の出迎えを受けたのでありました。・・・わたしは大概見当がついたので、いよいよ始まったな、と思いながら胸をどきつかせましたが、やがて平静になつて、赤農が運んで来る荷物を調べていました。間もなく荷物も一緒に私達と数人の連中を乗せた二台の自動車は、宮城前に並んでいる十数棟のバラックの玄関先に、ハタと停まりました。長い二、三丁もある殺風景な廊下を通り抜けて、Nはある一室に、わたしはその隣室にみちびかれたのでありました。

女だてらにあられない、何事か政治共犯の疑いを受けて、わたしは警視庁外事課の取調室に坐っていました。疲なしさを持たぬわたしは、ゆったりと椅子に腰を下ろして、帽子を目深に被り、ジャケットを脱ぎ、水色の洋装に身を包んで大きな澄んだ瞳で、今しわたしを調べようとする男の相貌を凝視していました。・・・彼は聴取書の用紙の前に、くろぐろと硯の墨を磨り上げて、筆をなめて身構えました。

「名前は。」「××××」「職業は?」「女優です。」そうして原籍、現住所、年齢を質して書き留めました。「エッ、貴女が××さんですか。よくラジオでドラマなどを聴いているんですが、フム、貴女でしたか。」・・・「××氏とは何時頃から、どういう関係かね。」「私の仕事の相談相手になって貰っているんです。モウ十年にもなりましょう。」「じゃあ、つまりパトロンだね。パトロンとしての補助をうけており、」・・・「国賊!社会主義者!などと、わたしもいよいよ明日から正式に折紙をつけられて、異端者の仲間入りをせねばならぬ。よしこのまま釈放されるようになって、反逆者として世間の扱いをうけ、一種異っている社会的特別待遇を受ける運命が定まる。有難くもないことだが、こうなれば仕方がないことだと、わたしは落ちつき払っているのです。」「

やがてわたしはもっと上役らしい人の、青羅紗を張った大きなテーブルの前に連れて行かれました。そこにはS係長なる人がわたしの顔を遠くから見詰めて待っていました。「今日は芝居の初日だそうですね。君はホンの参考人として来て貰ったのだから、正直に答えてくれさえすれば、直ぐに帰れるようにして上げる

からね。」さすがは老練の士である。その音声、態度は脅かすがごとく、諭すが如く、また慰めるが如く、繊細な語尾の階律までが、わたしの胸にひびいていったのでした。①

伊沢の回想に照応する昭和二年内藤の外遊は、上海を経てモスクワで果たす用務のためである。古参の社会主義者堺利彦が、再建間もない共産党の内紛を憂慮し、内情の聴取と打開への指針をコミンテルンに仰ぐ方途を採った。使者に予定された青野季吉は途上で躊躇し、党員ならぬ内藤がその代行を担ったのである。

昭和二年上海からモスコウへ（内藤氏治回想録―日ソ関係の裏面史）

わたしの二回目の訪ソは大正十四年（一九二五年）で、最後のモスコウ行（三回目）は昭和二年（一九二七年）の春だったと記憶しています。一年ずれているかも知れませんが、青野季吉君を連れて上海のソ連領事館へ行くと、リンデーという代理大使がいます。国民革命の北伐軍が目下上海に向って北上しているといっていました。その前の年、北京のソ連大使館が張作霖の襲撃をうけて閉鎖されたのです。上海には戒厳令がしかれていました。港内はイギリスの艦隊司令官が権限をもっていて、日本人の乗船者は特に警戒しているからと、リンデーは青野君に中国人に変装して行くようにと注意を与えてビザをくれました。思えばこの年は中国の歴史の大旋回した年でした。というのは蒋介石の北伐軍が上海を占領し、揚子江流域にまで進

① 『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』

出することになって、中国は辛亥革命以後の督軍・軍閥の時代の終焉をつげたこと、上海では五・三〇事件がおこり、それがキッカケとなって一面では打倒英帝国主義が、打倒日本帝国主義に切り換えられることになり、世界史に一つの起点をマークしたといえるのです……

その頃福本イズムが華やかで誕生早々の日本共産党はテンヤワンアヤの内紛。それで堺利彦君がわたしにどうしてもモスコウへ行ってくれというのです。どうも筋が通らない話で、共産党と関係のないわたしは、そんなことに介入するのは厭なので断ったら、堺利彦君が青野君を、さきに日本へきたピリヤニツクの答礼使として送ってもらいたいというので、止むをえず彼を連れて上海へ潜入し、ビザをもらってやったのですが、青野君は急に行かないと言いました。新潮社からのまれた世界思想全集の執筆のことで、大事な用件を忘れたからというのです。あとでわかったことですが、彼は心臓の持病があり、リンデー代理大使の忠告でふるえあがったのでしょうか……仕方ないからわたしがひとりモスコウへ行くことになりました。片山に会い、ブハーリンに会い、福本イズムについて山川・福本論争の内容伝達を一応果たしてきました。

片山は日本共産党については始終悩んでいました。第一回目の時だったか、わたしのモスコウのホテルへ来ると、すぐ東京の同志らに対する愚痴をこぼすのです……片山のコミンテルンの東洋代表として大臣待遇の三百ルーブルの月給をもらい、ほかにタイピスト手当九〇ルーブルがついていて、私生活には不自由はなかったが、日本共産党初期の情況には頭を悩まして居辛らかったようです……片山はどちらかというと、性格が暗い感じの人でした。ニューヨークではブロード・ウエーの三七番地に金持の家のコックをしながら、革命運動に奔走していた。わたしと体格が非常に似ていたので、わたしの古い洋服や外套をよく持って行きました。とにかく国際的な革命家でした。モスコウでもクレムリンの要人たちは殆ど片山を大先輩

として尊敬していたのですから、彼が死んだとき、スターリンがその枢かつきに加わったのも、コミンテルンの最長老としての同志セン・片山に最高の礼をつくしたものでしょう。①

コミンテルンはロシア革命から世界革命への進展をめざし、一九一九年レーニンによって創立された。モスクワにおける第一回大会には各国の組織十九から代表者が参集し、中国共産党に続いて一九二二年（大正十一年）日本共産党の結成も承認される。コミンテルン極東局ではモスクワ―上海―東京の戦略ルートを設け、中国、日本、朝鮮等への指示と伝達を行った。

アメリカ共産党の創立に参した片山潜は、一九二二年ヨーロッパを経てソビエトへ入国し、ソビエト全ロシア大会で演説するとともに、療養中のレーニンと会見する。以後彼はモスクワのホテルに居住し、アメリカ等での活動歴を評価されて、コミンテルン執行委員会幹部会員に選出された。長文たる彼の自叙伝は、北米時代までに止まるが、モスクワでの活動についてやや詳しい年譜が遺される。一九二七年（昭和二年）片山はコミンテルン日本問題調査委員会の一員として「二七年テーゼ」の作成に参与し、解党主義とセクト主義に反対して日本共産党の強化・大衆化を勧告した。②

〔未完〕

- ① 「内藤民治回想録―日ソ関係の裏面史」(下)「論争」一九六三年一月号、一六三―一六四頁。
② 片山潜著『わが回想 下』徳間書店、一九六七年。三三二―三三六頁。